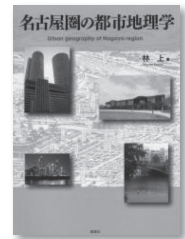


# 名古屋圏の都市地理学

風媒社 二〇一六年

林 上  
◎中部大学人文学部歴史地理学科教授



## 地誌学の伝統を遠ざけてきた現代地理学

都市地理学が研究の対象とする都市は日本中にたくさんある。海外も含めれば数え切れないほどであろう。それらの都市について何かを語ろうとする場合、最適とまではいわないが、語るにふさわしい都市を選びだし、資料やデータを用いて書いていくのは、もとより望ましい。特定の国や地方などには関係なく、選んだ都市をひとつのモデルや事例として都市の経済、社会、文化などのテーマについて語る。地域を絞っていないので、あちらこちらの事例が取り上げられる。全体としてはやや散漫になる印象は免れないが、テーマに即した都市が選ばれていれば違和感はないであろう。国際金融都市の代表としてニューヨーク、ロンドンを選んだり、国内の歴史観光都市として京都、金沢などを選んだりすれ

ば、読者の方も抵抗はない。そのような観点からすると、語る対象が名古屋圏の都市に限られている本書は、最初からハンディがある。名古屋圏に関心がある読者ならともかく、とくにこの地域に関心のない読者の興味をそそりそうにはないからである。さして有名でもない地方都市のことなど、どうでもいいと思われるかもしれない。まして本のタイトルに都市地理学とある。何やら堅苦しそうに地理学の専門書かと敬遠される恐れさえある。筆者はこれまで都市地理学分野の本を何冊か世に出してきたが、特定の地域に限定したものは遠ざけてきた。それはなぜか。地理学には地誌学という分野があり、特定の地域について自然現象から人文現象に至るまで多くのことがらを総合的に記述するという伝統が維持されてきた。これは日本だけではなく、世界のどの地域でもほぼ共通している。とこ

ろが第二次世界大戦後に大きな変化があり、総合的に記述するスタイルは時代遅れの産物とみなされるようになった。背景には東西冷戦下の国際宇宙競争があり、宇宙から地球が見られるようになったため、地表上のことは何でも手に取るようにわかるという楽観的な科学思想が優勢になった。地球表面上を這いずり回り、苦労して情報を集めて総合的に書くようなことをするより、テーマ別に収集したデータをコンピュータで統計処置して結果をだす方が意義があると考えられるようになった。経済学、社会学、心理学などの隣接科学が理論的アプローチを重視するようになってきたことも大きい。その影響を受けて、地理学も理論構築に力を入れるべきだという声があり、若い研究者の間で湧き起こってきた。

伝統的な地誌学につながる地域の個性よりも、地域にこだわらない一般性を重視する地理学的方法是、高度経済成長期以降、大学教育の中に浸透していった。そのような流れが現在も続いているためか、学界の中で正面切つて自らの専門を地誌学と名乗る地理学研究者は極めて少ない。ただし、地理教育科目としての地誌学は堅持されており、学校教育と地理学界との間には依然としてズレがある。

しかしこのズレは相対的なものであり、決して絶対的ではない。高校までの地理では、ひとつのテーマを専門的に追究するのではなく、地域を総合的に理解する方法を学ぶことが重視されている。それはそれで重要と思われるが、ともすると、地名や産物をやら覚え込んで知識量を増やす方向に向かいやすく、挙げ句の果て、学習者にはそっぽを向かれることになりやすい。高校までの地誌学的教科が地理学と思いついて大学に入ってきた学生にとって、一般性を重視する地理学はやはり新鮮に思われるであろう。地名や産物の羅列に終始していた無味乾燥な教科ではなく、本当の意味で世界や地域を理解する方法を目的にしたりするからである。高校までのように、自然から人文まですべてを対象として学ぶ必要はない。興味ある対象に向けて中身を掘り下げていく。その過程で多くの事柄が相互に関連していることに気づき、さらに知識の幅を広げていくとする。形式的には地誌学と似ている面もあるが、教科書の内容を上から与えられるか、こちらから求めていくか、そこには大きな違いがある。

### 名古屋大都市圏と名古屋圏の違い

さて、日本ではかなり以前から国内には三つの大都市圏があるといわれてきた。東京、大阪、名古屋の三大都市圏である。これは、これら三つの大都市を中心としてその周辺の地域が一体的に機能している地理的広がりとして理解されている。主役は大都市であり、ここに集まってきて溢れ出た産業や人口を周辺地域で受け止めながら全体でこなしていくという圏域である。それでは、東京大都市圏と東京圏、あるいは名古屋大都市圏と名古屋圏はどこがどのように違うのであろうか。これに答えるにはやや専門的な説明が必要であるが、簡単にいえば、前者が都市機能が実質的に作用している圏域であるのに対し、後者は都道府県単位で見た場合の圏域のことである。大都市圏の範囲は固定的ではなく、研究者が採用する都市活動の指標によって異なる。例えば、郊外から都心の職場へ通勤する人たちに注目すれば通勤圏になるし、都心のデパートへ買い物に出かける人に目を向ければ購買圏になる。逆に都心から見ると、新聞社の新聞がどこまで配達されているかという新聞配布圏や、ラジオの電波がどこまで届いて

いるかのラジオ電波圏といったものを考えることもできる。こうした幾つかの圏域を集めて平均した結果が大都市圏である。大都市圏があらかじめ決められた固定的範囲でないのは、こうした理由による。

これに対し、東京圏は関東中心部の四都県、名古屋圏は東海三県というように、後者の圏域は都道府県の集まりとして範囲が固定されている。しかしこれとても特別に強制力があるわけではなく、慣習的に使われているのを黙認しているという程度のものである。ただ国の統計や白書などで使われることが多いため、半ば正統的な範囲として世間一般では受け止められている。名古屋圏の場合、東海三県の知事と名古屋市長が集まって会議をする機会が少なくない。県域は行政上の形式的範囲といえなくもないが、国政選挙や徴税、警察、保健、公教育など、実質的に意味のある範囲として機能する分野も少なくない。その県域を単位として県民意識が醸成され、廃藩置県以来、年月を積み重ねてきた。しかし、戦後の高度経済成長期を通して企業や家計、個人の行動が広域化し、県域を越えて行われる日常的活動があたりまえになってきた。もはや県の中だけで処理することはできず、人、モノ、

情報が多く集まる有力な都道府県を中心に広域的な空間的範囲を考えなければならなくなった。都道府県とは別に東京圏や名古屋圏という広がり方が問題にされるようになったのは、こうした背景からである。

しかし、ここで疑問が生まれる。東京圏は東京都が中心の圏域であるからよいとして、愛知県が中心の圏域をなぜ名古屋圏と呼ぶのかという疑問である。東京圏の場合、都とその中にある二三特別区の名称が同じであるため一見すると都の名前を冠しているように見える。しかし実際は、圏域の中心に当たる都区部、すなわち東京という都市の名前を使っていると考えるべきであろう。同じ理屈で、



はやし・のぼる◎一九四七年、岐阜県生まれ。一九七五年に名古屋大学大学院文学研究科博士課程を修了後、名古屋学院大学経済学部助教授、名古屋大学情報化学部教授を経て、二〇〇一年に名古屋大学大学院環境学研究科教授に就任。二〇〇八年三月に名古屋大学名誉教授となり、翌四月に中部

大学人文学部歴史地理学科教授に就任。専門は経済地理学、都市地理学。一九八六年に「中心地理論研究」で文学博士の学位を取得。一九八八年には日本都市学会から「都市学会賞」を受賞。最近刊の『現代社会の経済地理学』をはじめ一四冊の単著のほか、『現代都市地域の構造再論』など三冊の編著がある。

名古屋の場合は愛知圏ではなく、名古屋圏と呼ぶのが実態に合っている。ついであるがら大阪圏は、大阪府、京都府、兵庫県、奈良県の四府県によって構成されているが、これは大阪府を中心とする圏域である。大阪は府と市の名前が同じであるため、これも大阪府を中心とする四つの府県の連合体と考えがちであるが、実際は大阪府が中心である。ただし大阪圏の場合、京都や神戸といった大都市があるうえに大阪市の面積が狭い。それゆえ大阪市が大阪圏の唯一の中心都市かという点で疑問がないわけではない。圏内に名古屋市に対抗できる大都市が存在しない名古屋圏とは圏域の構造が違っている。

### 名古屋圏という言い方以外の別の呼び方

愛知、岐阜、三重の三県からなる名古屋圏は、東海三県あるいは東海地方のことである。むしろこの言い方の方が地元の人々には馴染みがあり、テレビの天気予報でも北陸地方と並んで東海地方と呼ばれている。似たような名称として中部地方、中部圏、中京圏などの呼び方もある。名古屋にキーステーションがあるテレビ局は、これらのうちのどれかを局名として使用している。この地方にある大学

の間でも、こうした名称が使われている。つまり日本列島の地理的中央部分に相当するこの地域をどのように呼ぶか、その答えはひとつではないのである。一般に地名を付けるとき、命名者はその場所の固有性や特徴、あるいは他の場所との位置関係などを考えて付ける。命名者が誰であるかはつきりしない場合でも、とくに不都合がなければそのまま継続して使われてきた。地名とはそういうものである。しかし地名には隠れた意味が込められている場合もある。そのような場合、受け入れを拒否して改名したり、使われなくなったりすることもある。とくに国際的に使用される地名は国益や文化とも関係するため、敏感にならざるをえない。

東海地方の「東海」の起源が、歴史的に存在した都から見て東側にある海辺の地方であったからというのは、わかりやすい説明である。同じ理屈で九州を西海地方と呼んだのも理解できる。権力の中枢から見てどちらに位置するかという方角に依拠する命名である。韓国が「日本海」という呼称を認めず、「東海」と主張しているのは、自国の東側に広がる海だからという理由である。時代と状況は大いに異なるが、権力による命名の論理は驚くほ

ど似ている。中京圏という言い方も、これと似たところがある。歴史的に存在した西の都と現に存在する東の都の中間に位置すること根拠に、命名したものであろう。中心と中間は言葉はたしかに似ているが、意味はかなり異なる。同じ中京という字を書いて、都の中心を指す場合もあるため、混乱しやすい。中部についても、類似の課題がある。学校教育で教える地理では中央日本の一地方を指す範囲として「中部」という名前が使われているが、その範囲は非常に広い。空間的にある種のまとまりをもった範囲を圏とみなす考え方に立てば、相互関係が弱くただ隣り合っただけで並んでいるだけでは統一感に欠ける。

地名には使われてきた長い歴史があり、それは尊重しなければならない。しかし新しく名前を付ける場合は、その地理的範囲にふさわしい名前を選ぶように心がけるのが賢明である。名古屋圏という名称は、比較的、最近になって用いられるようになった。それは、愛知県の県庁所在地でもある名古屋市の都市機能が愛知県内はもとより、隣の岐阜県、三重県にも広く及ぶようになったという事実による。名古屋市へ通勤、通学、買い物などで出かける岐阜県民、三重県民が増えた。以前

は名古屋市や愛知県に住んでいた人が住宅地を求めて岐阜県、三重県に転出したり、愛知県の企業が土地や労働力を求めてこれらの県へ移転したりした。国鉄民営化をきっかけに始まった鉄道各社のサービス競争や、名古屋市を中心とする高速道路網の充実が、こうした動きを促した。これにより、住まいは愛知県内にはないが、名古屋市とその近隣地域と関わりをもつ人が目に見えて多くなった。「名古屋圏民」とでも呼べる人々が増えてきた現実をふまえ、そこで繰り広げられている経済、文化の問題を名古屋圏の問題としてとらえる必然性が生まれてきた。

### 名古屋がリードしてきた圏域の歴史

本書は、名古屋という都市が愛知、岐阜、三重の三県の主要な部分に対して実質的な影響を及ぼすようになったという認識のもとで執筆されている。それゆえ名古屋あるいは名古屋市そのものに関する記述が本書の中で占める割合は大きい。近代以降の都市化の歴史とりわけその原動力となった工業化の過程を振り返るとき、名古屋が担った役割がいかに大きかったかがわかる。産業の創出とその累積的集積、それにとまなう人口の集中、それ

らを支えるための市街地の拡大など、実に多くの側面で絶えず先へ先へと進む姿は印象的であった。やがて市域内では処理できなくなり、市外へと勢いは及んでいった。一部は名古屋市が周辺自治体を合併することで解決されたが、それではきかなくなり名古屋大都市圏が実質的に形成されていった。名古屋には周辺の都市にはない格別の役割があり、それが果たされていく軌跡を跡付けることは、名古屋圏の形成過程を辿ることでもある。

しかし、当然のことながら名古屋イコール名古屋圏ではない。本書の中でも再三にわたって強調したが、名古屋という大都市とりわけその都心部が現在のように存在できているのは、名古屋市以外の愛知県、それに岐阜県、三重県があるからである。都心部に集積するオフィス、小売業、サービスの多くは、名古屋圏内にある多くの企業、家計、個人と直接、間接に関わっている。営業の相手先であったり、労働力の依存先であったり、あるいは小売・サービスの販売先であったりする。もともと名古屋の周辺には独自の産業によつて成り立つてきた多くの都市があり、一部は名古屋に依存しながらも、自立的に発展してきた。これらの都市はそれぞれ固有の歴

史や文化をもっている。現在でこそ名古屋圏に含まれるという意識はあるが、以前はそのような意識は希薄で独自性が強かった。本書ではこうした都市をすべて取り上げることができなかったが、これらの都市の個性を尊重しながら現在に至るまでの過程と現状について触れるように心がけた。

都市が果たす機能は多岐に及ぶが、名古屋圏では製造業の果たす役割が他の圏域に比べて大きい。ものづくり圏やものづくり王国とも呼ばれるように、製造品出荷額全国一の愛知県を筆頭に岐阜県、三重県の生産額も多い。愛知県のこの地位は過去三〇年近くにわたって維持されており、今後も続くものと思われる。名古屋港が横浜港や神戸港を凌いで、国内で最大の貿易額、黒字額を叩き出しているのも、こうした生産力があつてのことである。本書の中ではこうした事実に触れることはもとより、なぜこのような地位に就くことができたか、その歴史的過程にまで踏み込んで記述した。現状をより深く知ろうと思うなら、過去にまで遡って掘り下げなければならぬ。そこで浮かび上がってくるのは、名古屋に集まつてきた企業家による創業や行政が財界とともに進めた各種インフラの建設であ

る。鉄道、道路、港湾、空港、用水、工業用地などが、企業活動を陰に日向に支えた。

土地区画整理事業が名古屋圏内の各地で歴史的に実施されてきたことも見逃せない。この事業は鉄道や道路などの単なる建設ではなく、人の住む地域を面的にすべてつくり変えるという一大事業である。ハードウェアよりもむしろソフトウェアにポイントがあり、地域に暮らす人々が一致協力し、長い時間をかけて取り組まなければ実現できない。国が決めた形式的な制度がいくらか優れていても、それを理解して受け入れる土壌がなければ不可能である。土壌は風土であり社会的、文化的な特性である。その土壌に深く染み込んだ気質や考え方といったインフォーマルな制度があつて初めて実現する。名古屋圏の中心都市である名古屋が、近世初期に計画的に建設されたという点にこそ、こうした伝統のルーツがあるのかもしれない。ものごとを合理的に考え、効率的に進めようという気質が尾張藩の城下町に当初から埋め込まれていたと考えられないであろうか。

### 都市地理学の一般性と総合性を考えて執筆

冒頭でも述べたように、現代の地理学では

特定の地域に関して事細かに記述する地誌学はあまり人気がない。地方の市町村史によく見られるが、その市や町についてやたら詳しく歴史的事実を並べ挙げられても、関係者以外は興味を抱かない。地誌学もこれと似たところがあり、閉じた世界だけですべてが成り立っているような印象を与える。名古屋圏の都市の歴史的過程と現状を書くにあたって最も気を配ったのは、こうした点であつた。対象は名古屋圏の中の都市であるが、そこでできごとと類似のことがらは、大なり小なり他の都市でもあつたはずである。どこの都市にもありそうな共通性や一般性を意識し、そうした文脈に立ちながら書くように心がけた。実際、製造業や小売業などの分野において、名古屋圏の都市で過去にあつたことは、他都市でもあつた。明治以降の近代化や軍事体制化、戦後も高度成長や石油ショック、バブル経済の形成と崩壊など、都市が経験した状況は国家的スケールにおいて同じようなものであつた。

しかしその一方、名古屋圏だから、名古屋圏ならではのといった地域性もまたみとめられる。社会や文化の面ではとくに目立つ。しかもこうした社会文化的要素は経済活動の中に

も入り込んでおり、名古屋圏のメーカーらしい行動パターンや特徴ある衣食住の文化的スタイルとして表出する。地理学に限らず、社会科学や人文科学では一九八〇年代以降、ポストモダンリズムや制度論を抛り所とする研究スタイルが支持を集めるようになった。差異化や個性化を重視する研究アプローチであり、本書もこのあたりを意識している。事実と違うことは書けないが、その事実をどのような視点から評価するかは、書き手の価値観次第である。ポストモダンリズムは芸術や文化だけの問題ではない。すぐれて資本主義経済における商品の開発や流通の問題でもある。世の中の雰囲気や価値観が変われば、求められる商品の種類や性質も変わる。それに応えられなければ市場からの撤退を迫られる。学問的アプローチもそれを見過ぎず、追走しなくてはならない。

都市をめぐる現象にみとめられる共通性や一般性を意識しながら、同時にまたその都市の個性にも気を配る。要するにバランスの問題であり、一方にだけに偏っていたら面白くない。このことは都市地理学の学問的性格にも通ずるところがある。都市地理学は都市の経済、社会、文化、人口などのテーマごとに

詳しい分析や考察を行う。これにより都市の経済地理学や社会地理学などが成り立つ。しかしそれだけが都市地理学ではない。同じ都市の中でテーマ相互間の関係性を明らかにし、その都市の個性を浮かび上がらせる。個性は経済、社会、文化などその都市にそなわる属性を互いに絡ませることで自ずと現れてくる。属性には他の多くの都市と共通する部分が少なくない。つまり一般性が含まれており、そうした共通傾向をふまえたいうえで都市の個性が現れるように記述する。本書では、名古屋圏の都市に関することは本文の中で記述し、そこでは十分記述できない都市地理学的一般性については、章末に設けたコラムの中で書くようにした。本書が名古屋圏の都市に関する地誌学的著作にとどまらないことを、あえて意識するための工夫である。

### 地理学的アプローチによる名古屋論

首都を抱える東京圏は例外として、全国的スケールで注目を集めている地域の中に名古屋圏も入っていると見てよいであろう。少子高齢化が進み、総人口の減少が止まらない現状にあって、都道府県別に見て人口が増加している数少ない県の中に愛知県が入っている。

これは明らかに、愛知県が他地域から人口を集めるような産業構造をもっていることを示すものである。楽観的な見方は慎まなければならないが、今後しばらくの間、愛知県を中心とする名古屋圏の経済的勢いは維持されるであろう。全国一の製造品出荷額、貿易額最大の名古屋港、それに二〇二七年開業予定の中央リニア新幹線など、いくつかの実績や計画がこうした勢いの背景にある。そのような動きを後押しするかのようには、「名古屋もの」と呼ばれる一連の書籍やテレビ番組・イベントなどが出版界やマスメディアから発信されている。

名古屋ものの中にはキワモノも含まれており、まさに玉石混交といえるが、名古屋のもの社会の中で一定限度、評価されていることは明らかである。それが愛知県で人口が増えていることに現れている。これからこの国が生き延びていくには、足腰の揃った大都市圏や圏域に人やモノを集め、生産や生活の基盤を固める必要がある。尾張徳川家の城下町から始まり、近世、近代を経て現代に至る歴史を通してひとつの世界が築かれ、今日の名古屋圏が生まれた。こうして築かれてきた名古屋圏は、これからの日本を支えていくの

に欠かせない重要な役割を果たす圏域である。名古屋的なもののルーツを辿り、その強さと弱さを見極めることは、期待される名古屋圏のこれからを見通すためにも欠かせない。

過去の歴史的出来事を興味本位に取り上げ、前後の脈絡もなくただ事細かに書き記す気にはなれない。かといって、楽観的な未来論を繰り広げ、分不相応な実力以上の自画像を描いて悦に入る気にもなれない。まさに中庸、適度な距離を保ちながら名古屋圏の実像に迫ることの重要性を強く感ずる。歴史的エピソードを探し出し、そのこと自体を論ずる楽しみを否定するつもりはない。また郷土愛に燃えて自らの歴史を実際以上に見せたいとする気持ちも、わからないわけではない。しかしながら、社会性や客観性を欠いた独りよがりの議論では支持や共感を得られないであろう。普遍性という視野に立ちつつ、都市や地域の個性にも配慮するというスタンスが、ここでも必要とされる。

それにしても、地理学者は自制的というか、真正面から都市や大都市圏などについて論ずることをあまりしてこなかった。用いる資料やデータは豊富であり、それ自体説得力は大

きいが、そこまで終わっている場合が多い。これは科学、とりわけ自然科学としての地理学すなわち自然地理学が身近にあるせいか、地理学全体が学問的中立性を崩してはいけないうというパラダイムに縛られていることが、その一因であるように思われる。論文ではそうした傾向がとくに強く、客観的事実や実証性が重んじられる。厳しい論文査読者のお世話にならない書物にすれば、行間に自分の思

いを込めることができる。しかしその場合は、一般読者というまた別の厳しい社会の目に晒される。地理学者は実証主義に凝り固まらずもつと柔軟に地域について論じてもよいのではないかというメッセージが、本書の裏には隠されている。そのメッセージがどれくらい伝えられたか、はなはだ心もとないが、本書からその意欲だけでも汲み取っていただければ幸いである。